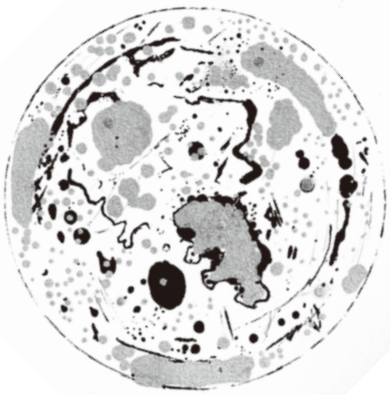
# ヴィラ・マーヤ便り

## 知と文明のフォーラム　ニューズレター

「マーヤ」はサンスクリット語で「幻」の意。
ヴィラ・マーヤは伊豆高原にある知と文明のフォーラムのセミナーハウス。

2009　04　25　No.2

画・ryoku yonekawa

## ポスト・グローバリズムの処方箋

北沢方邦

### ポスト・グローバリズムの世界へ

イスラエル軍によるガザ地区への容赦ない空爆（民主主義を説きながら民主的に選ばれたハマスを否認した欧米に究極の責任がある）に、増大する幼児を含む犠牲者の数、大企業による容赦ない「派遣切り」に、公園のベンチや路面に寝泊りし、あてのない職探しをするひとびとの群れ、二〇〇九年は心も凍るような光景からはじまっている。

それが新しい世界誕生まえの苦しみであるならいいが、グローバリズムを展開してきた古い世界の、終ろうとして終らない終焉の苦しみにしかみえないところに、大きな苦痛がある。かつてドイツ・ロマン主義者たちが名づけた「世界苦（ヴェルトシュメルツ）」の時代がふたたびやってきたのだ。

新しい世界、つまりポスト・グローバリズムの世界を考えるためにも、グローバリズムの根本的な分析とその誤りの剔抉が必要であるが、いまここでは、経済危機というよりもほとんど世界恐慌といっていい現在の状況のよってきたるところを考えてみよう。

### グローバリズム崩壊の原因

グローバリズム崩壊の根本原因は、ソ連解体後の唯一の超大国であったアメリカ合衆国の、政治・軍事的および経済的世界制覇それ自体に内在する矛盾にある。

たびたび繰り返してきたように、レーガン政権以来、合衆国は政治・軍事的には新保守主義、経済的には新自由主義という双子一体のイデオロギーに支配されてきた（民主党のクリントン政権でさえも、新自由主義的経済政策は継承していた）。この双子一体のイデオロギーとは、「自由と民主主義」そして「自由市場経済」を世界に広げることによって、世界の秩序と安定が保証され、個々の民族や文化の「歴史の終焉」がもたらされる、もしこの「世界の進歩」を妨げるものがあれば、軍事力をもってしても排除しよう、というものである。

内在する矛盾の第一は、その「自由と民主主義」は西欧的価値観にもとづくものにすぎず、それぞれの種族や文化に固有の自由や民主主義は無視される、いいかえれば、西欧的または近代的自由や民主主義の一方的な強制にほかならない点にある。九・一一はそれに対する最初ではないにしても、最大の暴力的返答であった。矛盾の第二は、経済的規制緩和や市場万能は、利潤最優先の資本主義の論理からして必ず最大利潤を求める金融工学を生み、市場を最大限に投機化する点にある。情報技術の進展によって瞬時に移動可能となった巨大な流動資金は、投機先を求めて世界を駆けめぐる。一九九三年のメキシコ経済危機、九七年のアジア通貨危機は、いわゆる第三世界に利潤を求め、それがえられないと瞬時に引き揚げられるこの巨大流動資金のなせる業である。

第一の矛盾はアフガンとイラクの泥沼化した戦乱を生み、またその膨大な戦費がアメリカ経済を脆弱なものとした。第二の矛盾は八〇年代末の日本の不動産バブルを生み、それを崩壊させ、また二〇〇〇年代アメリカの住宅バブルを生み、そして今回世界恐慌の引き鉄となるその破綻を導きだした。バブル破裂後のゼロ金利・円安の日本から膨大な資金を借り、ドルに投資するいわゆる円キャリー取引、さらには自己資金の数十倍にも昇る資金

を借り、投機するレヴァレッジ（梃子作用）投資など、日本のゼロ金利政策がこのカジノ（賭博場）資本主義の狂乱に大いに利用されたことは記憶に新しい。

そのうえわが国は、高度成長期以来の「輸出立国」体制が災いし、金融機関の打撃は小さかったにもかかわらず、また皮肉にもそのために起こった急激な円買い・円高にも災いされ、輸出産業を中心とする実体経済が大打撃を受けることとなった。小泉改革による労働の規制緩和のお蔭で、全労働者数の三〇パーセントを占めるにいたった非正規雇用労働者が真っ先に契約解除され、文字どおり路頭に迷うこととなったのだ。

いつの時代にも、矛盾や破綻のしわ寄せは社会的弱者に襲いかかる。

### ポスト・グローバリズムの構想

こうした状況と世界の根本的な変革は、まず近代の思考体系、とりわけ経済合理主義からの人間の解放からはじまる。グローバリズムの資源収奪によって危機にさらされている自然や環境の復権が、生態系や生物多様性の回復にほかならないように、かつて人間は、その自然環境と不可分の文化の多様性にもとづいてそれぞれの豊かさを享受してきた。近代合理主義からの解放は、そうした生活や各自の思考体系の復権である。

そのために必要なことは、グローバリズムを推進してきた経済権力の国際的規制、各国の産業構造の根本的転換、また個人のレベルでは、とめどもなく肥大した欲望からの解放として、生活スタイルやフィロソフィーのこれも根本的転換にほかならない。

まずこれもすでに述べたが、世界貿易機構・国際通貨基金・世界銀行などグローバリズムの進展に協力してきた国際諸機構を変革し、経済権力の国際的規制とフェア・トレード推進、国際的経済格差の是正のための機構に再編しなくてはならない。

次に各国の条件に対応した産業構造の変革であるが、わが国のためには以下の変革が必要である。

一　第一次産業の根本的再編：ハイテクを利用した自然エネルギー開発、有機農法など循環的で持続可能な農林漁業の再開発による村落コミュニティの再建、それによる雇用の創出。

二　第二次産業の根本的再編：「輸出立国」体制の解体と、それに対応した産業の縮小、それに代わる新エネルギー・新素材開発や、上記第一次産業再開発および下記第五次産業に必要なエコ・ソリューション産業の創出。

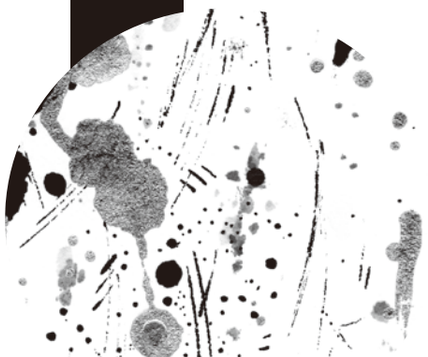
三　第三次産業の再編：長距離輸送型や大型店中心などの消費体系の転換、地産地消・地場産業・地場専門店中心型の消費体系の創出、いいかえれば量から質への消費生活の転換。

四　第四次産業としての情報・教育・文化・芸術産業および活動の大規模な育成。

五　第五次産業としてのリサイクル・自然復興産業および事業の大規模な育成。

地域の条件に応じたそれぞれの産業の再編が必然的に国内の自由で公正なトレードを生みだす。国際貿易もまったく同じであろう。

人間の生き方の変革、いいかえれば生活スタイルやフィロソフィーの変革は、また別の機会に論ずべきであるが、このグローバリズムの崩壊による世界恐慌は、いやおうなしに各自に生活様式の変革を迫っている。たんに倹約や質素に徹するというのではなく、「真の豊さとはなにか」を根本的に問いなおす絶好の機会というべきであろう。



### 知と文明のフォーラムブログより

## ベートーヴェンの横顔が見える

二世紀近く先を歩む人であれば、その後ろ姿は二百年の霧に包まれておぼろげになる。まして個性的なエピソードに事欠かぬベートーヴェンのような人は、なおのこと虚像の歪みも大きくなるだろう。わたしたちの大方は、いびつな「英雄」ベートーヴェンを仰ぎ見てきたにちがいない。

青木やよひ著『〔決定版〕ベートーヴェン〈不滅の恋人〉の探究』（平凡社）を読めば、そんな時間の霧や人々の曲解によるオーラのない、鮮明なベートーヴェン像が手に入る。

ひとつには、筆者みずからの足を運んで参照した一次資料が豊富なこと。大学などのアカデミックな制度のなかに籍をおかぬ、いわば在野の筆者が、現地調査をくり返して資料を丹念に集めたのである。そして、もうひとつは、透徹した推理と論理性に貫かれていること。おそらく読者は、文体からある種の論理的リズムを受け取り、そのリズムが波線となって音楽家の像を縁取るのを感じるだろう。

ここに至ってわたしたちが手にするのは、もはや彼の後姿ではない。わたしたちの隣人と呼んでもいいような彼の横顔である。彼との距離が一挙に縮まったのだ。ただし、このことだけは銘記しておきたい。ベートーヴェンがわたしたちに近づいたのではなく、わたしたちのほうが彼に近づいたのだということを。凡百の伝記作家は、才気ある創造者が生活人としてもたねばならぬ世間的、通俗的側面を強調することで、世人の関心を買おうとする。そうやって天才をわたしたちのレベルに引きずり降ろしても、得るものは何もない。

この本の著者はちがう。音楽家のあまりに人間的な闘いぶりを見つめているわたしたちのほうこそが、しらずしらずのうちに、自分のうちにもそのような闘いに向かう気構えが備わってくるように思えてしまうのだ。勇気がわく、といっていいかもしれない。このとき、わたしたちは少しばかりベートーヴェンに近づいているのだ。もちろん、著者の筆力によって。

（「おいしい本が読みたい」第四話／むさしまる）

わたしたちのフォーラムは知のさまざまな分野に取り組み、それぞれの専門家をお招きしてセミナー活動をおこなっています。これまで開催された十一回のセミナーは、その時点での問題意識を表明するとともに、フォーラム成長の里程標でもあります。その一端をここにご紹介します。

## 二〇〇六年

### ●三月一八・一九日　第一回セミナー
### ヨーガとインド哲学1――身体と思考を不可分に結びつけるヨーガとその実践
**講師：北沢方邦**

### 七月一五・一六日　第三回セミナー
### ヨーガとインド哲学2――近代二元論を克服する道としてのヨーガとその実践
**講師：北沢方邦**

「ヨーガ――インド哲学とその実践」というテーマで、二〇〇六年の三月一八日・一九日、七月一五日・一六日の二回、セミナーが行われた。前者は知と文明のフォーラムの最初のセミナーである。講師はヨーガ歴四〇年の北沢方邦さん、場所はヴィラ・マーヤ。参加者はそれぞれ一四人と一二人。

いまなぜヨーガか、という基本的な問いかけから始まり、ヨーガの目標とするものがパンタジャリの『ヨーガ論』を引用して語られる。ヨーガは単に肉体の運動ではなく、実践する者の身体を変え、思考を変え、生き方そのものを変えるものである、と提示される。

ヨーガ（yoga）の原義は英語のyokeと同じで「くびき」を意味し、身体と思考を不可分に結びつける意味があるという。そしてこの二つを媒介するものがプラーナ（気）ということで、エクササイズはまず呼吸法から始まる。そして肉体の訓練であるハタ・ヨーガの実践に入る。

パドマ・アーサナ（蓮華座）をはじめとする各種のアーサナ（姿勢）を教わる。筋肉・関節・内臓など身体を多面的に使うものだと実感するが、不摂生を積み重ねているわたしにはなかなかにキツイ。そしてまた講義。

第二回目のセミナーでは、「近代二元論を克服する道としてのヨーガ」を中心に講義が行われる。最新の物理学理論と古代インド哲学との共通点など、興味深い話が語られる。十の基本アーサナの習得も大きな課題であった。なおこの講義をもとにした『ヨーガ入門――自分と世界を変える方法』が、平凡社新書として二〇〇八年二月に刊行された。（森）

### ●五月二七・二八日　第二回セミナー
### 性差とジェンダー1――ジェンダー概念の見直し
**講師：青木やよひ、北沢方邦**

本来はインド・ヨーロッパ語に見られる、名詞の分類としての性別を指すジェンダーという言葉が女性学に導入されたのはそれほど古いことではない。当初それは、生物学上の雌雄を示すセックス（性差）に対し、文化的・社会的に形成された男女差と定義されていた。

確かにこの概念を導入することは性差別の根源を探るのに有効であり、私自身この言葉をもっとも早く使った一人である。だが、性差とジェンダーとの関係は、一方が先天的であり、他方は後天的（人為的）であると割り切れるほど単純ではない。

にもかかわらず、十分な議論もされぬまま、八〇年代後半以後、ジェンダー＝性役割（＝性差別）の安易な図式化が行政レベルにまで定着する。一方、女性学の中には、性差（セックス・ディフェレンス）を論ずる者はアンティ・フェミニストだとする意見まで現われるようになった。

それが一九世紀以来の「解剖学的宿命」論への反発であるのは理解できるにせよ、ヒトの生物学的所与を不問にして進められる「男女平等」は、人間の現実を無視した観念論と言わざるをえない。必要なのは、まず偏見をそぎ落とした性差の見直しであり、ジェンダー概念の正確な把握にあるのではないか。それがこのセミナーの狙いであった。（青木）

### ●一一月二五・二六日　第四回セミナー
### 野生の思考――西アフリカの音の文化／北米先住民ホピ、ナバホの宇宙論
**講師：杜こなて、青木やよひ、北沢方邦**

初日は、作曲家杜こなて講師による西アフリカの音の文化について、映像と音響を駆使した、明解な語り口のレクチャーが展開された。おどろくほど多彩な、しかも西洋的楽器分類を無化するような複合的楽器を使って形

知と文明のフォーラムブログより

## 美こそが愛するに足りるもの——ヴィスコンティの『ベニスに死す』

アルコールが入ると聴きたくなる音楽がある。マーラーの交響曲もそのうちのひとつで、先週も、職場近くの居酒屋で飲んだ帰り、iPodから聴いたのは第四交響曲だった。私の心は、鈴の音とともに始まる第一楽章の素朴な出だしを聴くたびに、何十年も昔の中学時代に帰っていくような気がする。小遣いを貯めてやっと手に入れたバーンスタイン指揮の第四番交響曲のLPは、私の宝物のひとつだった。期末試験の終わった夜などの、音楽好きの仲間と一緒に聴く、あの幸福な時間を懐かしく思い出すのである。

ところで、飲むとなぜマーラーが聴きたくなるのか。その秘密は、マーラーの音楽の持つ過剰さにあるのではなかろうか。人間の感情や思想のみならず、動物、植物、鉱物、さらには惑星、恒星と、その表現する世界はまさに宇宙そのものである。神や天国も登場する。飲んで異常に鋭敏になった感覚は、マーラーの拡大・拡散した宇宙をそのまま受け入れるのであろう。

さて過日、私は三十数年ぶりでルキーノ・ヴィスコンティの『ベニスに死す』を観た。そして、この映画が実は、音楽映画であることを発見したのだった。つまりヴィスコンティは、マーラーの第五交響曲の第四楽章アダージェットを映像化するために、トーマス・マンの原作を用いたに違いないと確信したのである。

弦楽器のみで奏でられる第五交響曲のアダージェットは、数あるマーラーの緩徐楽章のなかでも、もっとも美しいもののひとつである。マーラー特有の誇大さもなく、ひたすらに美しい。恋する対象が女性であれ少年であれ、その焦がれるような激しさと不安、甘美な恋の感情が、余すところなく表現されている。エロスと美が、これほど渾然一体となった音楽も珍しい。この楽章から、ヴィスコンティは、ヴェネツィアのリドの砂浜に戯れる美少年を、まるで幻を追うように求める老作曲家像を作り上げたのに違いないのだ。

美のみが愛するに足りるものであり……美こそはわれわれが感覚的に受容れ、感覚的に堪えることのできるたったひとつの、精神的なものの形式なのだ——ソクラテスが美青年パイドロスに語った言葉を、トーマス・マンは『ベニスに死す』で引用している。ヴィスコンティは、この小説の他の要素は切り捨て、全編をマーラーの音楽で満たすことによって、美の本質をみごとに映像化したのである。

（「楽しい映画と美しいオペラ」その三／jimosa）

作られる音。じつに音楽的でありながら「音楽」ではない音の連なり。そして、各部落に固有の微妙に異なる音色とリズム。

この〝音の共同体〟のなかでもっとも重要な役割を果たすのが太鼓である。ともすれば原始的心性を表出する楽器と安易に括られかねない太鼓は、その実きわめて複雑な表現力をもつ。太鼓の音はイメージではなく、合い言葉、太鼓言葉だという。

講義を締めくくったのは講師自身が作曲した「高慢ちきな娘」（アフリカの民話に取材とのこと）のヴィデオ映像だが、その太鼓の鼓動には、わたしたちの奥底にしまいこまれた、はるかな「ことば」の響きがした。

二日目は、北沢方邦・青木やよひ講師による北米先住民ホピ・ナバホの宇宙論が、これら部族の歴史と現状を概観しつつ展開された。

レヴィ＝ストロースの提起した野生の思考をさらに問題化する視座、すなわち、神話的思考と科学的思考をあわせもった「野生の思考」という理論的視座から、祭祀や儀礼、社会組織、農業技術など具体的な生活空間に宇宙論が読み取られてゆく。スライドを使っておこなわれた講義は、現地での体験に裏打ちされ、きわめて説得的であった。

それにしても、講義全体を通して、人類学や民俗学によくある、文字をもつ観察者とそうでない被観察者との非対称な力関係が感じられないのは、いっそうすがすがしい。おそらくそれは、講師自身が肉体化を目ざす宇宙論的対称性と、かの地のそれとが響きあっているからに違いない。（片桐）

## 二〇〇七年

### ●二月二日　第五回セミナー／レクチャー・コンサート
### 不滅の恋人にみるベートーヴェンの変貌

**講演：青木やよひ、楽曲解説：北沢方邦**
**ピアノ演奏：パーク・ヨンヒ**
**会場：ルーテル市ヶ谷センター**

二〇〇七年二月二日金曜日午後七時、ルーテル市ヶ谷センターで、レクチャー・コンサートが催された。私たち知と文明のフォーラムにとっては、初めてのレクチャー・コンサートであった。例年二月といえば大雪に見舞われているのに、今年は暖冬で雪もなく、あの寒さもない。神様が味方してくれたのだろうか。

会の代表の一人である青木やよひさんの『決定版ベートーヴェン〈不滅の恋人〉の探究』が、二〇〇七年一月に平凡社より、また同年一〇月ミュンヘンのイウディツィム社よりドイツ語版が刊行されるということで、昨年一〇月初旬、出版の記念レクチャー・コンサート開催が決定された。そして私が担当ということに。何も知らないということは恐ろしいことで、いとも簡単に引き受けてしまった。

それからは、ホールの選定、チラシ作成、チケットの委託販売、振替口座開設、プロモーション、プログラム作成等、四ヶ月はあっという間にすぎていった。その間、青木さんは、一二月一〇日付け公明新聞に「没後一八〇年を前に——ベートーヴェン像の変容」を、一月二七日付け東京新聞に「ベートーヴェンと〈不滅の恋人〉」を寄稿している。また毎日新聞等、新聞雑誌に何件かの案内記事が掲載された。

当日のプログラムは次のとおり。①講演：〈不滅の恋人〉にみるベートーヴェンの変貌——青木やよひ　②楽曲解説：ベートーヴェンの後期様式と作品の意味——北沢方邦・青木やよひ・パーク・ヨンヒ③ピアノ演奏：ベートーヴェン　ピアノ・ソナタ ホ長調作品一〇九——パーク・ヨンヒ

講演では青木さんの五〇年の研究成果が分かりやすく話され、その親しみやすい語り口に聴衆は引き込まれていた。また楽曲解説では、北沢さんによる後期ピアノ・ソナタの構造分析が評判を呼んだ。そして最後に不思議な魅力をたたえたパークさんのピアノ演奏を皆さんに楽しんでいただいた。

このレクチャー・コンサートには二四〇名のお客様がご来場下さった。楽友会フロイデのメンバーはじめ多くの方々のご助力をいただいて、マイク・空調の不調などゆき届かないところもあったが、振り返ってみると心弾む四ヶ月であった。（徳武）

### ●三月三日　第六回セミナー／公開シンポジウム
### 北欧型教育と日本の教育——個別教育を中心とする北欧型教育に学ぶ

**講師：伊藤美好、佐藤全、古山明男、リヒテルズ直子**
**会場：日本女子大学**

日本女子大学森田伸子教育学科長の司会により、北沢方邦氏の挨拶ののち、古山明男（古山教育研究所主宰、『変えよう！日本の学校システム』著者）、伊藤美好（『パンケーキの国で——子どもたちと見たデンマーク』著者）、リヒテルズ直子（翻訳・通訳業、教育問題研究家、『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』著者）、佐藤全（日本女子大学人間社会学部教育学科教授）の四人のパネリストが発表を行なった。

古山氏はフィンランドの学校を視察した報告を中心に、伊藤氏はデンマークの学校を現地での子育ての体験もふくめ、カリキュラム、教育の理念、教員の勤務形態や学校長の役割、子供の現状等について、またリヒテルズ氏がオランダについて、やはり現地での体験をふまえながら学校制度、政治的事情、教育改革の経緯等について、それぞれ日本の現状と比較しながら報告を行なった。これを受ける形で、佐藤教授が教員養成の立場から日本の現状について報告を行なった。

その後、質疑応答の時間があり、活発な議論が続いた。全体として、教育改革が成功し、学力が向上したといわれる諸外国でも、教育に関しては常に議論があり、さまざまな意見や理念が競合していること、また日本と比べて優れていて取り入れたいと思われることがいろいろとあること、そのためには日本はもっと教育に予算を投入すべきで、それは決して不可能な金額ではないこと、が発言者の間で合意された。

二〇〇名を越える参加者があり、予定した休憩時間をカットして発表、活発な質疑応答が行なわれた。また終了後に行なわれた交流会でも情報交換、議論が続き、盛会であった。このシンポジウムの報告書が日本女子大学により作成され、関係者に送付された。（杉山）

### ●一〇月一三・一四日　第七回セミナー
### 性差とジェンダー2——脳の性差および文化と思考の問題／アメリカ先住民女性の文学とジェンダー

**講師：青木やよひ、北沢方邦、杉山直子**

ジェンダー概念の再検討を統一テーマとした前回セミナーとは趣を変えて、参加者の立場でみると今回はある種のコラボレーションが効果を発したように思える。一方にあるのは総論としての「ジェンダー・システム論」であり、もう一方には、「アメリカ先住民女性の文学とジェンダー」の各論がある。あるいは一方の原理と他方の現象といってよいかもしれないが、ともかくそれぞれ独自の面白さとは別の、響き合いのごときものが生まれたのではないだろか。

「ジェンダー・システム論」は、それぞれの種族の神話的思考・宇宙論を直接反映するジェンダー分類法（すべてを女性・男性に分類する思考）、目に見える社会組織・制度とバランスをとる潜在的社会体系としてのジェンダー・システム、心身二元論を奉ずる近代社会でのジェンダー・システム喪失、この三点を中心に明解な論が展開された。とりわけ、「表層の非対称を深層の非対称で

補正し、社会的超対称の実現で宇宙論的ジェンダー・バランスを回復」との指摘には、生命原理の秘密を知らされるような快感を覚えた。

これにたいし「アメリカ先住民女性の文学とジェンダー」は、北米先住民の女性の文学という分野にしぼった刺激的な報告であった。世界最先進国のなかで作られたネイティヴ・アメリカン・イメージと向き合いながら、先住民の女性としての受苦と尊厳と可能性を作品化しようとする「現場」の諸問題が提起された。先住民ということばがどこかよそよそしく響くよう仕組まれた日本では、こうした形の生の情報はとても重要である。（片桐）

## 二〇〇八年

**●四月一九日**
**第八回セミナー／レクチャー・コンサート**
**「世界音楽入門&西村朗の夕べ」**
**講師：北沢方邦、西村朗／演奏：上野信一、蛭多令子、藤本隆文、松永加也子、上野信一&フォニックス・レフレクション**
**会場：セシオン杉並**

以下に掲載するのは浦達也氏より北沢方邦氏宛の私信です。ご両者の了承を得てここに転載させていただきました。浦達也氏はNHKの元チーフ・ディレクター。教授だった江戸川大学を拠点に、東大などでメディア論を講義。著書に、『実感の同時代史』（批評社）など。

---

北沢方邦先生　　浦　達也

二〇〇八年　四月　二三日　　謹復

今回は四月一九日の「レクチャー・コンサート」にお招きいただき誠に有難うございました。長時間になるためレセプション・交流会だけは体調調整のため別場所で休養していましたが、第一部・第二部とも通してばっちり「世界音楽」提唱の北沢哲学（新しい知の方向、ゲーテ→ベートーヴェンを踏まえた）と、天才作曲家・西村朗さんを中心に据えた最前線の表現者たちの実演が聴衆をも巻き込んで見事に交差交流しあう、この大饗宴を堪能しました。と同時に予測 をはるかに超えた「事件」ともいうべきこの瞬間にこの場所に立ち会えて本当 に良かったです。深謝しています。

世界の初めの「訪れ」は「音連れ」であったとも言われていますが、「世界音楽」という概念は「音楽」といより更に初原的で多様性のある「音」とか「振動」そのもののように感じました（僕の大好きなＥＮＹＡの曲にも似ています）。

なお第二部の冒頭で北沢先生がレセプションで「〝主観性〟をネガティブに捉えすぎていないか？」という質問が出たことに対して丁寧に説明をしてくださり、実は僕も同じ疑問を持っていたのでその真意がよく分かりました。他のことは第一部のレクチャー&対論（構成が巧み）でよく分かり、ドビュッシーとバルトークの演奏でその「現代性」や「宇宙観」が体感できました。

第二部は文字通り「西村朗の夕べ」となり、これが滅茶苦茶（最高の褒め言葉）に楽しい（というより楽しすぎる）。ハップニングすら楽しい（失礼）。何より演奏者が凄い。超一流のピアノだ。超技巧も何だか楽しみながら心身一体で舞い踊っているようだ。顔も楽しい上野信一門下のパーカッション・グループのお姉さんお兄さんも師匠同様に元気一杯喜一杯。僕も一緒に叩きたくなった（こんなことを思ったのは初めて）。金管楽器の方がより霊的世界への参加感を誘う。

代わりに精一杯の拍手（とブラヴォー）。しかし西村さんは北沢先生同様に観客席でも舞台に上がってもクールだ。そこがまたいいのだ。お二人からは詩のような素敵な言葉やレトリックも沢山いただいた。知も血も音を連れて舞い共鳴しあった夢の饗宴は二〇時に終わった。

その余韻はいまなお続く……

嬉しかった。

たのしかった。

久しぶりに哲学と音に酔う。

謹白

---

**●六月一四・一五日　第九回セミナー**
**食料・身体性・環境セミナー　シリーズ1**
**講師：安田節子、青木やよひ、北沢方邦**

二〇〇八年は一月の中国製冷凍ぎょうざ事件に始まり、食品偽装や汚染米流通と食の安全を脅かす事件が次々と発覚した一年だった。当フォーラムも食政策センター「ビジョン21」を主宰する安田節子さんを主講師に迎え「食料・身体性・環境セミナー」を開催し、食の現状をめぐる危機的状況と方向転換の必要性を語り合った。

一日目は、遺伝子組み換え食品の生産、流通を独占する多国籍企業の冷徹な手法を告発したドキュメンタリー映画『食の未来』を鑑賞後、クローン牛、放射線照射、ＢＳＥ（狂牛病）、鳥インフルエンザなどをめぐる問題が取り上げられた。

二日目には、ＷＴＯ主導による自由貿易の弊害、バイオ燃料ブームによる輸入穀物の不足と価格高騰、温暖化や大規模単一栽培の影響による世界的な食料不足、日本の食料自給率三九％にみられる農業衰退の現状、そして有機農業への転換の必要性、広がる地産地消の動きなど持続可能な農への提言があった。

一九六〇年代の「緑の革命」以来、経済合理主義にもとづく食糧生産がいかに環境を破壊し、南の国々に住む人の飢えを招き、また人間の生命や健康に害を及ぼしているかを認識できた二日間だった。さらにこの現状をより多くの人と共有したいと、今年六月、安田節子さんと他二人のシンポジストを迎えての第二回の集いを開催することになった。（大束）



**●一一月一・二日　第一〇回セミナー**
**二一世紀の市民的公共性**
**――小さなユートピアをめざして**
**講師：篠原一、青木やよひ、北沢方邦**

今回のセミナーでは、主に、篠原一先生を講師にお招きし、「シティズンシップと市民的公共性――小さなユートピアをめざして」についてご講話いただいた後、二一世紀の市民や市民運動はどうあるべきか、むしろそれをどう築くべきか議論しました。

篠原先生によると、議会制民主主義はそれだけで民意を反映しえるものではなく、それを補完したり、また異議申し立てをするために、「市民としての資格や要件(citizenship)」を持った市民一人一人が活動し、行動し、コミュニケーションし、討議する上でできる「公共空間(public sphere)」が中核となってできる、市民的公共性の強い成熟した「市民社会（civil society）」を作っていく必要がある、とのこと。その公共空間を作るために有効な討議デモクラシーという制度の紹介と、グローバリゼーションの中でどのように公共空間を作っていくか、ＮＧＯの活躍などの説明をいただきました。

そのお話の中で特に心に残ったのは、いま、市民としての資格や要件（citizenship）において最も大事とされているのは、他者への尊重だということ。個々の市民が互いに他者を尊重し合って、交流していって、討議して合意を目指すことが大事であり、その互いに尊重し合う関係の中には〝give and take〟だけでなく、〝give and give〟の関係もあるということでした。権利と義務という関係概念は産業社会、生産社会の論理であり、環境問題や福祉、介護の問題などは、それだけでおさまるものではない、というお話は、考えてみれば当たり前のことなのですが、でも、生まれたときから産業社会、生産社会の論理の中で生きて来た私は、無意識のうちに、権利と義務は一体だと思っていたのでしょう。〝give and give〟が義務とまでは考えられていなかったし、逆に、〝take and take〟の立場になった場合、対等に議論に参加できないような気がしていたように思います。それだけ、近代の効率主義に汚染されていたのだろうと思いますが、自分がどちらの立場に立っても、他者を尊重し、権力者に対しても批判的能力を持って、行動しながら生きていきたいと思いました。

講演後半には、日本人が政治的に淡泊であり、政治的なことに対して自分の意見を公にすることを嫌う国民であることが話題になりました。日本のように運動のない社会もめずらしいのだとか。黙っていることそれ自体が、いまの政治を肯定し、支えていることになるのですが、しかも、最近では、それを超えて、アナルゲシアといって、痛みを与えられている人が痛みを与えている本人に投票しにいったりするのだそうです。この状況をいかに打開していくか、こどもたちへのシティズンシップ教育が重要だ、いや、それ以前に親への教育が重要だと、講演後の座談でも大きな話題となりました。

セミナーが終わって一月近くが経ちました。主婦として、家事と育児の日々に戻った私は、子育てを中心とする今の私の時間軸と近代社会の時間軸とのあまりの隔たりに疲れ、当初の高揚した気持ちがかげり、時に、ものも言わぬ市民の感覚にもどりつつある自分を感じます。でも、一人一人が日常生活で感じる違和感を見つめ、自らの怒りを公にすること、エモーションを大事にし、パッションに高め、よりよい社会を作るために市民として努力していくこと、それが必要であること、そして、討議デモクラシーやＮＧＯなどそれらを可能にする手段があること、そういった手段を模索していくことが大切であることを、今回のセミナーで学びました（そして時を同じくして、違う形ではありますが、アメリカの大統領選挙が一人一人のNoが社会を変えていく力となることを示してくれました）。私もこれからの人生、自分なりのユートピアをかかげて努力していきたいと思います。（林）

## 二〇〇九年

**●一月二四・二五日　第一一回セミナー**
**人間にとって労働とはなにか――**
**ウィリアム・モリスから宮沢賢治へ**
**講師：大内秀明、北沢方邦**

この二月七日、東京都美術館で開催されている「アーツ&クラフト展」を見に行った。ウィリアム・モリスの壁紙やタペストリーなどの工芸品は美しいには違いないが、私とは別世界のものだという印象をそれまで持っていた。しかし、この展覧会の二週間前に、マルクス経済学者の大内秀明先生を講師にお迎えして、モリスに関するお話を伺った後でもあり、私のモリス観はかなり変化していた。彼の壁紙作品などに描かれている植物や動物たちの背景に、モリスの豊かな自然観や労働観を感じとることができ、実りあるひとときを過ごしたのだった。

大内先生のセミナーのタイトルは「人間にとって労働とは何か――ウィリアム・モリスから宮沢賢治へ」であった。モリスと賢治の思想と生き方がお話の中心であったのだが、二人の作品が生み出された背景もよく理解できた。コッツウォルズの豊かな自然とモリス、イーハトーヴの、厳しいけれど懐かしい風景と賢治。風土を抜きにして二人の芸術を理解することはできないようだ。

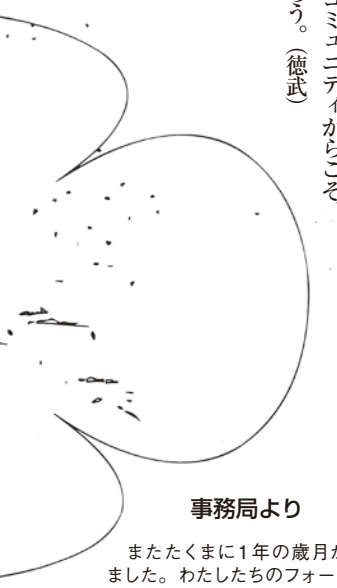
モリスは、イギリスの産業革命による機械制工業化の時代に生まれている。彼は後期マルクスの『資本論』から、コミュニティの再建、共同体を中心としたギルド的

社会主義を学び、「アーツ&クラフト運動」として実践したとのこと。モリスの美術作品の制作過程は、それこそ彼の思想の実践だったのだと納得できた。彼にとっての労働とは、Art is Man's Expression of his joy in labor（労働の芸術化、芸術の労働化）であり、joy and pleasure であったのだ。

これは、A・スミスによる古典的な労働価値説にいう、労働とは toil and trouble という考え方とは大きく異なっている。また、ロシア革命に疑問を持っていた宮沢賢治は、「農民芸術概論綱要」の中で、労働についてこう言及している。「芸術をもて、あの灰色の労働を燃やせ」と。これは、ウィリアム・モリスの Art is Man's Expression of his joy in labor を引用、継承したものであるとのお話だった。

大内先生のセミナーが行われたのは、アメリカのサブプライム問題に端を発した金融経済恐慌で世界が揺れている最中だった。日本では、従業員の大量解雇、内定取り消しが相次いでおり、日比谷公園で寝泊まりする若者のニュースがマスコミを賑わせていた。この出来事についての大内先生の次の言葉は納得のいくものだった。「昔なら、都市で過剰労働力となった者は、農村に帰っていった。しかし現在では、家族や共同体の崩壊により、すでにそのような仕組みは働かず、農村はセイフティネットの役割を果たさなくなってしまっている」。

国家社会主義が崩壊し、資本主義社会も先が見えない現在、モリスと賢治の思想は見直されなければならないとのこと。新しい形の共同体、コミュニティからこそ、未来を展望できるということだろう。（徳武）



## 事務局より

またたくまに1年の歳月が過ぎました。わたしたちのフォーラムにとってはまことに充実した月日でもありました。レクチャー・コンサートで西村朗先生にご登場願い、伊豆高原には安田節子さん、篠原一、大内秀明両先生をお迎えしたわけですから。

いっぽうで、わたしたちの生きる社会・経済情勢は決定的に変化しました。しかし、この変化ははけっして不測の事態ではなかったはずです。不測どころか、当然起こりうる今日の状況のなかで、どのように身を処し、よりよい世界を模索しうるかを考えてきたのが、これまでのフォーラムの活動そのものではなかったでしょうか。

だとすれば、今からの試行錯誤はいよいよ重要になります。フォーラムにいっそうの推進力を得るために、多くの方々の知恵と志をいただきたいものです。

当フォーラムはブログを開設しています。アドレスは以下のとおりです。どうかご一読ください。

http://blog.goo.ne.jp/maya18_2006/

ヴィラ・マーヤ便り　No.2
発行日　2009年4月25日
発行所　知と文明のフォーラム
〒413-0232
伊東市八幡野伊豆高原14-6
代表　北沢方邦　青木やよひ
編集部
TEL 042-488-3048
FAX 042-441-4565

## 次回セミナーのご案内

二〇〇八年六月、伊豆高原のヴィラ・マーヤでの「食料・身体性・環境セミナー」の開催をきっかけに、これに触発される形で、深刻な食と農の現状を広く一般の人たちとも共有できる場を持ちたいと、シリーズ2はシンポジウム形式による集会を開催します。世界的な経済危機のさなかにある現在、ポスト・グローバリズムの世界の構想にとっても、「食」の問題はひとつのキーワードとなりえます。パネリストには、食の問題に長年取り組み警鐘を鳴らしてこられた安田節子さん、ミクロ経済学を専門とする植田敬子さん、神奈川県綾瀬市でCSA農業（Community Supported Agriculture・地域に支えられた農業）を営む片柳義春さんをお迎えしています。食・農業に於けるエコ・ソリューションとは？　ぜひ、この機会に多くの方に参加いただきたいと考えています。

**食料・身体性・環境セミナー　シリーズ2**
**シンポジウム「食の現状・農の未来」**
パネリスト　安田節子（食政策センター・ビジョン21主宰・日本有機農業研究会理事）
植田敬子（日本女子大学家政経済学科教授）
片柳義春（CSAシステムによる「なないろ畑農場」運営）
序論と司会　北沢方邦（知と文明のフォーラム代表・信州大学名誉教授）

日時　二〇〇九年六月二八日（日）
午後二時～五時
参加費　八〇〇円
会場　世田谷区・北沢タウンホール第一集会室
小田急線・下北沢駅南口下車三分
電話　〇三・五四七八・八〇〇六

### 今後の活動予定

**●四月　第一二回セミナー／レクチャー・コンサート〈世界音楽入門Ⅱ〉**
**新実徳英の世界　螺旋をめぐって…生命の原理**
講師：北沢方邦、新実徳英、杉浦康平
演奏：上森祥平、寺岡有希子、永井由比、長尾洋史、上野信一&フォニックス・レフレクション
会場：セシオン杉並

**●六月　第一三回セミナー／シンポジウム〈食料・身体性・環境セミナー2〉**
**食の現状・農の未来**
パネリスト：安田節子、植田敬子、片柳義春
司会：北沢方邦

続いてのセミナーには、講師に坂本義和先生、杉浦康平先生も予定しています。